



東日本大震災の巨大津波メカニズム解明へ

昨日11日(月)は、13年前に東日本大震災が起きた日でした。帯西でも、犠牲者への祈りを捧げるために、黙とうを行いました。午後2時46分に地震が起きたのですが、その時間は低学年が下校しているため、朝の時間に黙とうを全校で捧げました。



さて、海洋研究開発機構を中心とする日米欧豪の国際研究チーム(世界9か国の地震や地質学などの専門家ら約50人)は、東日本大震災を起こした震源域付近で今年の9月から掘削調査に乗り出すそうです。プレート境界が大きくずれ動いた宮城県沖の海底を掘り進め、ずれた境界面を含む地層の岩石などを採取するそうです。世界最高レベルの掘削能力を持つ日本の地球深部探査船「ちきゅう」(全長210メートル、重さ5万6752トン)によって行われます。調査のやり方は、船の上からドリル付きのパイプを水深約7000メートルの海底におろし、地下を950メートル掘り抜くといえます。巨大地震が起こした、想定外とされていた津波の原因を解明し、今後の地震の際の津波発生メカニズムを少しでも解明し、被害の最小限度の抑止になればと願います。

学校百景⑫～運動場の水仙～

今年も、黄色い水仙が正門前とターザンロープ前の南側の花壇に咲き、3月11日を迎えた昨日も咲き誇っています。

当時、気仙沼市の階上小学校と交流の窓口になっていた、今村先生に話を聞きました。この水仙は、東日本大震災で被災された岩手県一関市の商工会の方々が送ってくださったそうです。今年、23歳になる帯西の卒業生が、4年生のときに、ボランティアで、津波で流された宮城県気仙沼市の階上小学校へ国語辞典や絵本をおくる活動を始め、それが学校全体に広がりました。その支援の中で、被災地からの思いとして、水仙が送られてきたものです。



2011年3月11日、東日本大震災では、宮城で津波に襲われた方々が、絶望の淵に立たれていたとき、自宅のがれきの中に咲く水仙を見て希望を感じ、それから「希望の花」と称されているそうです。今村先生は「当時は200球ほどの水仙は、まだ小さい背丈でしたが、今では大きくなって咲き誇っているので、時の流れを感じます。」としみじみと語られました。

正門付近の九州に長く自生する水仙は、2月ごろからいい香りを漂わせながら咲き始めますが、この東北の水仙だけは、3月11日を待っているかのように、その前後に咲き始めます。(今年は暖冬のために少し早く咲きだしました。)